

---

# 死物語【こよみメモ】

黒貂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死物語【こよみメモ】

### 【Nコード】

N2068BA

### 【作者名】

黒貂

### 【あらすじ】

皆死んだ。

戦場ヶ原も、八九寺も、神原も、千石も、羽川も、火憐ちゃんも、月火ちゃんも、影縫さんも、臥煙さんも、斧乃木ちゃんも、貝木も、忍野も、忍も、皆、死んだ。

こうなったらさ、もう逃避するしかないよな。  
だから、待ってる皆。

僕もすぐ、そっちに行くから。

001 (前書き)

思い立ったが吉日

と、いう訳で、思い付いた日にパパッと書いて投稿しちゃいました

## 【001】

今から僕の友好関係についての話をしようと思う。

あまりに幼稚で低レベルで、聞くにたえない部分もあるかもしれないが、よかつたら聞いて欲しい。

……いや、聞いて欲しいと言ったがそれは嘘だったかもしれない。

これは僕の友好関係を現す話でもあるが、同時に一方的に弄ばれた話でもある。

失敗談と言っても差し障りないかもしれない。

だから正直なところ、聞かれるのは少し恥ずかしかったりもする。でもまあ、こんな僕に興味を持ってくれるのなら、聞いてくれればいいと思う。

弄ばれたとは言え、決して嫌な気分になったりする事はないのだし。

よく間違われるのだが、僕は人付き合いが嫌いな訳ではない。

確かに学校では羽川や戦場ヶ原以外と喋った事は殆どないし、友達は限りなく少ない。

年賀状だって届かないし、ケータイにはほんの少ししか番号が登録されてない。

しかし。

しかしだ。

前述したように、僕は決して人付き合いが嫌いな訳ではない。

苦手と言われれば否定は出来ないかもしれないが、むしろ好きだ。

実は前世が同じなんじゃないかと疑っている、八九寺眞宵との絡みを見てくれればそれは十二分に理解してくれると思う。

じゃあ何故今こんなに友達が少ないかと言つと、やはり一番大きいのはレベルの高い学校に入り落ちこぼれ、馴染む機会を失ってしまったからだろう。

しかしそんなのは今からの僕の頑張り次第でなんとでも出来る。

じゃあ何故友達を積極的に作るうとしないのかと言つと、それは僕が春休みに吸血鬼に襲われた事から由来する。

あれ以来僕は怪異という存在を知り、数々の怪異を見てきた。

怪異を知れば怪異に曳かれる、だそうだ。

そしてそのおかげで僕は、何度も危険な目に遭い何度も皆に迷惑をかけた。

つまり何が言いたいかと言つと、怪異を知ってしまった以上、怪異を知らない人間を巻き込む訳にはいかないのだ。

僕は大変な馬鹿で、誰かが困っていたら見過ごす事は出来ない。

ゆえに僕はもし怪異に困っている人がいたら助けようとする。

それは殆どイコールで皆に迷惑をかけ、心配をさせる。

だから、どうしても僕は自分から積極的に友達を作る気になれないと、というのが理由の一つだ。

しかし、怪異に関して唯一、そんな配慮を必要としない友人がいる。妖怪変化のオーソリティ。

全国を放浪するアロハのおっさん。

吸血鬼に襲われた僕を助けてくれた、忍野メメだ。

彼は軽薄でチャラいが、怪異に関しては誰よりも頼りになり、とても面白い（笑わせてくれるという意味ではない）存在だ。

さて、前置きが例のごとく無駄に長く……え？短いつて？  
ははは。

元気いいな、なんかいいことあったのか？

忍野メメの決め台詞を借りたところで、いい加減そろそろ始めよう。  
僕と友人の、シリアスに見せかけた、ただのじゃれ合い話を。



## 【002】

一番最初は八九寺眞宵だった。  
彼女はくらのやみに追われていた。

彼女自身が自分からそう望んでそうした訳ではないにしろ、彼女は結果として怪異として嘘をついていた。  
そしてそれを知った彼女は、僕達を巻き添えにしてしまう前に、自分から消えて逝った。

次は戦場ヶ原ひたぎだった。  
彼女は卒業式の日に殺される予定だった僕を助けるために、たった一人で蛇神と化した千石撫子に立ち向かった。  
しかし専門家ではない彼女に何か術がある訳でもなく、あっさり惨殺された。

だが彼女は無駄死にをしに行った訳ではなかった。  
彼女は貝木から大金を払って聞き出したという呪いで、千石撫子を道連れにする事に成功した。

その次は阿良々木火憐と阿良々木月火だった。  
彼女達は正義ごっこで常に敵がいた。  
そしてある日、彼女達はその敵に拉致されレイプされ、挙げ句の果てにその様子を撮影されネットに流された。  
そして後日、全裸で精液にまみれ、犯し殺された二人の死体が見付かった。

両親はそのせいで心を病み、首吊り自殺した。



その次は神原駿河だった。  
彼女は完全に鬱状態だった僕のために、毎日のようにうちに励ましに来てくれた。  
しかしある日うちに来る途中、いつものように走っていた彼女は大型トラックに激突され、壁とトラックに挟まれて潰れ死んだ。  
遺体は見せてくれなかった。

その次は斧乃木余接と影縫余弦と貝木泥舟と臥煙伊豆湖だった。

彼らはこの連続して僕の周りに死人が出る事に何らかの怪異性を感じたらしい。

だから何が起こっているのか探るため、大学時代のメンバー全員で調べる事にした。

しかし忍野メメだけはなかなか見付ける事が出来なかった。

全国を放浪している忍野メメは、文明を嫌うため痕跡が残らないのだ。

しかし万全を期したい臥煙伊豆湖達はあらゆる手を使って探し続けた。

探し続けていたのだが、その探していた全員が死体になって発見された。

その死体は、喉が切り裂かれ、内臓は飛び出し、頭は欠け、足は引きちぎれて、皮膚が剥がされた、明らかに事故などではなく、殺されたとわかる惨いものだった。

全員が死んだ上に、忍野メメの手がかりは掴めず、忍野メメも死んでいる可能性が高いと羽川翼は予想した。

……そして……羽川翼。

彼女は今……僕の腕の中にいる。

僕の腕の中で苦しんでいる。

静かに……しかし怒りながら。

「……阿……良々木君……。なんで……。なんで……。こんなこと……。したの……。……。駄目だよ……。……。こんなの……。……。駄目だよ……。……。逃げ……。……。駄目だよ……。阿良々木……君……」

それが最後の言葉になった。

……。お前は最後まで僕の心配ばかりしてくれるのか……。自分が僕に殺された事よりも……。僕が逃げる事の方が重要なのかよ……。そこは……。僕に……。なんで殺したんだって……。殺すなんて絶対にしやいけない事だ……。怒ってくれるとこだろうよ……。

「逃げちゃ……。駄目だって……?」

『逃げ……。……。駄目だよ……。』

……。言われたばかりの言葉を思い出し……。何度も反芻する……。

「そんなの……。……。そんなの……」

無理だろ。

……とは言わなかった……。

否……。言えなかった……。

「僕には無理だ……」

……。やっぱり言った……。

耐え切れなかった……。

枯れたと思っていた涙は……。羽川が死ぬ前からとめどなく溢れ出ている……。

……。ごめん……。羽川……。

でも……。そんなには苦しくはなかったらろう?」

ちゃんと苦しくない方法を調べて…ちゃんと準備をして…ちゃんと実行したんだ…。

僕にしては上出来だと思う…。

忍野が言ってた通り…お前はなかなか隙がなかったから難しかったけど、ちゃんとやれたぞ…僕…。

…安心しろ…羽川。

僕もすぐに…お前達のところに行くから…。

…すぐにこんな現実を抜け出して…お前達が待っていてくれるそっちに行くから…。

そうして僕はポケットから小さなビンを取り出し…その中に入っている錠剤をありったけ手の平に出す。

毒。

…吸血鬼は不死身だが…不死力が尽きればその限りじゃない…。毒だって効く…。

…それでも一般人に比べれば致死量に天と地ほどの差があるが…致死量はある事にはかわりない…。

今手の平の上にある毒はほんの数錠ではあるが…一粒でシロナガスクジラがあっさり死ぬくらいの猛毒だ…。

吸血鬼もどきの僕でもきつと…殺してくれるだろう…。

吸血鬼の死亡原因の九割は自殺で…さらにやり方は太陽に身を晒すという投身自殺らしいが…こっちの方が絶対確実だし楽でいいと思う…。

…いや…大抵の吸血鬼は太陽に身を晒したら殆どすぐに蒸発するのか…。

伝説となったキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードに噛まれた僕だから…不死力が異常なんだ…。

まあ…今は忍に血をやっていないから限りなく人間に近いけど…。

そういえば最後に血をやったのはいつだろう…。  
もうかなり昔のような気がする…。

……つか…最近忍の姿をめつきり見ないと思っていたら……そうだったのか…。

彼女もまた…死んでしまったのか…。

死んだのだ…旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード、忍野忍は…。

そうか…また死人が増えたのか…。

なに……たった一人増えただけだ…。

もう僕は死には慣れたんだ…。

こんなの慣れっこだ…。

これだけ死んだなら…一人くらい死んだってもう何も思わない…。

……訳がない…。

忍と僕は言葉で言い表しづらい複雑な関係だった…。

が…数ヶ月前までは……和解もして……それなりに楽しい日々を送っていたんだ…。

何も思わない訳がない…。

気付くのが遅れた事が……更に罪悪感を感じさせる…。

しかし……だったら早く死ななきゃいけない…。

忍が明日死ぬのなら……僕の命は明日まででいい…。

忍が今死んでいるのなら……僕は命を一刻も早く捨てなければならぬ…。

そういう……関係なのだ…。

……これじゃあ……まるで死ぬのを躊躇してる僕が死ぬために……お前が背中を押してくれてるみたいだな…。

最後まで迷惑かけっぱなしで悪い…。

………ありがとう…。

……さあ……もう十分に考え事はした……。  
後悔なんて……ありすぎてしていない……。  
これで終わり……。  
これで終わるのだ……。  
この苦しみから……逃れる事が出来るのだ……。  
羽川は最後にああ言ったけど……逃避は決して悪い事じゃあない……。  
それは羽川が教えてくれた事の一つだ……。  
だから……羽川……。

「僕は逃げる。正々堂々と、胸を張って、ここから逃げる」

そして手の平の小さな山を口に放り込……

「全く、何やってるのさ。阿良々木君」

めなかつた。

手をはたかれ、薬を全て落としてしまう……。

しかしその声には聞き覚えがあった……。

振り向くと

「な……っ……お前……」

そこにいたのは

「はっはー。元気いいねえ、何かいいことでもあったのかい？」



【003】

「……………お…忍野……………」

……………そこにいたのは忍野だった…。

「んー。でもどうやら見る限り、ちょっと間違っちゃったようだねえ。元気はなさそうだ、はっはー」

……………飄々とした様子でそこにいる…。

……………間違いない…。

忍野だ…。

……………忍野メメが、やっと現れたんだ…。

……………でも…。

「……………遅えよ…。遅すぎんだよ…」

「僕としては大急ぎで駆け付けたつもりなんだけどね」

「もう皆死んだんだよ…!!」

……………こんな時にも飄々とした態度に腹が立ち、怒鳴ってしまっ…。  
……………しかしそれでは収まりきらず、続ける…。

「八九寺も、戦場ヶ原も、千石も、火憐ちゃんも、月火ちゃんも、

神原も、斧乃木ちゃんも、影縫さんも、臥煙さんも、貝木も、羽川も……皆死んだんだよ！！遅いにも程があんだよ！！」

……怒鳴りつける……。

……ただの、八つ当たりだ……。

……忍野が悪い訳じゃないのはわかってる……。

……でももっと早く現れていけば……。

もっと早く現れていれば、どうにかなったんじゃないかと思ってしまっ……。

「どこで何やってたんだよ……。……お前がいれば……。お前がいれば、何とか出来たんじゃないのかよ！」

「そんな怒鳴るなつて。全くさつきと違って元気いいなあ。何かいいことでも「ねえよ！」

遮る。

……そんな、人を馬鹿にした台詞なんか、聞きたくないんだ、忍野……。

「いい事なんかこれっぽっちもねえよ！嫌な事だらけだよ！なんで僕がこんな目に……」

「被害者面が気に食わねえつつつてんだろーが！！」

「っ」

……怒鳴り返された。

………こんなの、初めてだ。

説教を喰らったり怒られたりした事はあっても、こんな風に怒鳴ら



れた事はなかった。

今まで忍野からは一切感じた事のない、殺気を帯びた視線…。  
これが本当に忍野かという、鋭い目…。

…… 怖い… 怖い… ……。

視線とか… 迫力が怖いんじゃない…。

忍野…… 僕にはもうお前しかいないんだ…。

… 僕を…… 責めないでくれ…。

…… 僕を…… 見捨てないでくれ…。

「…ふう。やっぱり人を睨むのって疲れるねえ。まあ効果は十分あったみたいだからいいか。安心していいよ。僕は実際怒ってなんかいないからね」

… 一瞬でいつもの表情に戻った。

…… とりあえず、怒っている訳ではないらしい事に少し安心…。

… しかし…。

「…… 僕が… 加害者だったのかよ」

…… あの時は…… 春休みの時は、僕が間違いなく加害者だった。

被害者面してたのを… 忍野に指摘されたのを覚えている。

だが… 今回は断じて違う…。

僕は何もしていない…。

しなきゃいけない事をやらなかった訳でもない…。

自分から何か首を突っ込んだ訳でもない…。

だから今回は… 僕は被害者なはずだ…。

純粋な… 蛇切縄の時の千石のような… 完全な被害者なはずだ…。

「全く阿良々木君は…。えーと、どこに居たんだってという質問だっけ？その質問に答えると、僕はその時どこにもいなかったんだよ」

「……は…？」

「厳密に言えば、この世界にはどこにもいなかったと言った方がい  
いかな。…はあ、いい加減気付いてくれないかなあ、阿良々木君」

「……なんにだよ…」

……意味がわからない…。

何に気付けというのだ…。

「全く阿良々木君は…。…って、もうこれも二回目だね。全く阿良  
々木君はが口癖になっちゃいそうだよ。あれだけ怪異に関わったん  
だから、怪異の事を調べようとか思わないのかな。ちょっとでも調  
べていたなら、確信するまではいかなくとも、可能性の一つとして  
考えられると思うんだけどなあ」

……なんだよ…。

…僕が何に気付いてないってんだよ…。

…勿体ぶって見透かすだけ見透かしてないで、早く言ってくれよ…。

「早く言えって感じの顔だねそれは。全く阿良々木君は世話がかか  
るよ。でも頼られてると思えば悪い気はしないかな。意外と甘えん  
坊だよ、阿良々木君は。おっと、そんな目で見ないでくれよ、こ  
っちまで暗い気分になっちゃうじゃないか。仕方ないな、教えてあ  
げるよ。この世界はね、夢なんだよ、夢。阿良々木君の、夢の世界」

「………はあ…？」

………夢の世界…？

これが、僕の望んだ通りになる世界だとも言うのか…？

…いや、そんな訳はない…。  
ならなんだ…。

何かの比喩なのだろうか…？

「比喩なんかじゃないよ。ここは、紛れも無い君の夢の中なんだ。ツンデレちゃんが死んだのも、委員長ちゃんが死んだのも、全部夢なんだよ。はっはー、大胆なネタバレになっちゃったね。これは、全て夢でしたっていう夢オチなんだよ」

「…………いや…ちょ…待てよ…。意味わかんねえよ…。…なんだ…？僕は数ヶ月にも渡る長い夢を見ているとでも言うのか…？」

「そつだよ。君が体験したように思える数ヶ月は、全部夢なんだ。全部、何もかも、夢なんだ。現実の阿良々木君はここ一週間くらい寝込んでるよ」

「一週間……。じ、じゃあお前は一体なんなんだよ。今ここに居るお前は、一体なんなんだよ！お前も僕が作り出した夢だつて言うのかよ！」

「いや、僕は僕さ。妖怪変化のオーソリテイ、忍野メメ。夢に関する怪異も沢山いるからねえ。人の夢の中に潜り込む手段を持っている事くらい推理出来ないかな」

「……………。助けに、来てくれたのか？」

「助けない。君が勝手に助かるだけ」

「…………現実では、誰も死んでないんだな？」

「死んでないね。皆ピンピンしてるよ」

「……………うっ…うっ…」

「おいおい、泣き出すなよ。まだ阿良々木君が助かった訳じゃないんだぜ？」

死んでない。

皆、死んでないんだ。

これはただの夢で、いつものように怪異絡みの厄介事に巻き込まれただけなんだ。

そう思ったら、涙が溢れてきた。

さっきの羽川を殺した時の涙とは違う。

嬉し泣き、だ。

「大した友情だねえ。生きていてるのがわかったただけでそんなに喜んでくれるとは。伝えた僕としても嬉しいよ」

当たり前だ。

皆、あんな惨い死に方をした。

と僕は思っていたんだ。

それが、実は夢でした、皆死んでません。

って言われたんだぜ？

拍子抜けもいいとこだ。

……………そして、嬉しい裏切りもいいとこだ。

……………さて、いい加減気持ちを切り替える必要があるようだ。

正直、切り替えるのは無理に等しい。

夢とは言え全員死ぬのを体験したのだから。

今だっつてかなりの鬱だ。

死ねと言われたらすぐに死ぬる。

それがいきなり全て夢だと言われ、かなり混乱もしている。でも、切り替えなきゃいけない。

忍野の話だと、これも怪異の仕業なのだ。

一週間も僕は寝込んでいるらしい。

これ以上皆を心配させる訳にはいかない。

だからさっさと解決して、さっさと目覚めよう。

きつとそこには、最高の目覚めが待っているはずだ。

「……悪い。もう大丈夫だ。状況は……正直まだよくわかってないけど、とにかく僕はまた怪異に曳かれたんだな？夢に関する怪異に」

「おや、もう復活したのかい？強がらなくなつていいんだよ。僕はそのくらいわかってるから。でもまあ、そういう事かな。多分だけど」

「多分て……。お前でもまだ全てはわかってないって事なのか？」

「いや、そんなもんじゃない。殆どわからないよ。お手上げ状態さ」

「何!？」

忍野が……お手上げ状態だと？

あの忍野をもつてしてもわからないって事は……。

僕、ひよっとして今とんでもないピンチなんじゃないか？

「夢に関する怪異つてのも、実は確証を持ってた訳じゃないんだよね。試しに阿良々木君の夢に入ってみたら合ってたって感じかな。まぐれ当たりだよ、はっはー」

「マジかよ……。……でも、心当たりくらいはあるんだろう？夢に関するってどこまでわかってるなら、ある程度絞れてるはずだ」

「いや、それが全く心当たりがないんだよ。夢を見せるって怪異はいくらでも居るんだけど、こんな人を絶望に陥れる夢を見せる怪異なんてものは寡聞にして聞いた事がないんだ。……ただ、これは僕の勘だったりもするんだけど、この怪異の目的はなんとなくわかったかな」

「目的？」

「……ふむ。」

目的がわかってるなら対処のしようもあるか……。

「……よかった。」

お手上げとか言われた時は本当にかなり焦ったが、それなら何とかなるかもしれない。

首の皮一枚繋がった気分。

「……本当よかった。」

「なんだよ、目的って」

「阿良々木君を殺すこと」

「……は……？」

今、何か変なこと言わなかったか？

誰か……具体的にはこの僕を殺す……とか、なんとか……。

「だから、阿良々木君を殺す事が、この怪異の目的であり、ここに

居る理由なんだと思うよ」

.....。

繋がったと思った首の皮一枚が千切れる幻聴が聞こえてしまつという、精神をかなり病んだ高校三年生男子がここに居た。  
ていつか、僕だった

【004】

「……………どういふ事だよ、忍野」

この怪異の目的は、理由は、僕を殺すこと？

……………いや、意味わかんねえよ。

なんだよ、殺すって。

「どついう事って、そついう事だよ。この正体不明の怪異は殺す事を目的とした怪異で、今回は君が狙われたというだけの事じゃないか。普通普通。至つて普通さ」

「ああ成る程。そついう事か。だつたら普通だな。……………なんて言えるかっ！」

ノリツツコミだ。

ただ切れ味は無いに等しく、滑り気味だった。

……………いや、でも殺す事が目的つてなんなんだよ。

殺人鬼か？

殺人鬼の幽霊でも僕にとり憑いたのか？

「全く阿良々木君は……………つて、また言つちやつたよこれ。口癖になつちやつたじゃないか、どうしてくれるんだい」

知らねえよ。



そんなん自分で直せ。

ていうか、何度も言われて悲しくなるのはこっちなんだからな。とは言わない。

話を逸らしてる場合じゃないんだよこっちは。命狙われてるかもしれないんだぞ。

「……で、本当一体なんなんだよ。それが目的だってわかってるなら、そう考える根拠ってものがあるんだろ？せめてそれを教えてくれよ」

「だから言つたろ。勘だよ、勘。専門家としての勘」

「……因みに勘が外れることは？」

「何故だか、僕は勘に従って間違いを犯した事はないよ」

「……だろうな」

だとすると…。

いや、考えるまでもなく、そうなんだろう。

この怪異は、僕を殺したいんだ。

忍野が言うなら間違いない。

「ていうか阿良々木君、本当に怪異の事全く勉強してないんだね。君は人を殺す事が目的の怪異が居ることに驚いていたようだけど、僕は君に驚いたよ。人を殺す事を目的とした怪異なんてさらに居るつての。普通に考えたつて、殺人癖があつた幽霊とか、逆に殺されて人を憎しみ片っ端から殺していく幽霊とか、いくらでもあるじゃないか。それに何度も説明したと思うけど、怪異っていうのは人の思いによって生まれるんだ。人が思い、信じ、奉り、畏れ、敬う事

によって成立するんだ。つまり大雑把に言ってしまうえば、誰かが何かを考えて、それが噂で沢山の人を知るようになれば、それが何であれ怪異になるんだ。だから怪異っていうのは無限に居るし、増え続け、消え続ける。ゆえに人を殺す事が目的の怪異なんて居たって至って普通だし、当たり前なんだよ。……って、おいおい阿良々木君？なんでまた泣いてるんだい君は。本当に元気いいなあ。何かいいことでもあったのかい？」

は？

泣いてる？

何言ってるんだよ忍野………って、あれ！？

本当に頬が濡れている！？

……こんなことで、無意識のうちに泣いてたのか…。

……そんなに、僕の精神は参ってるのか。

……そうだよな、この怪異は、僕を殺そうと、僕に自殺させようとしたんだから。

「いや、ちょっとな。…お前にこんな風に説教されるの久しぶりだし、夢とは言えあんな目に遭ったあとだし、それがいきなり夢だつて言われたし、なんか……色んな感情とか思考がごっちゃになってるけど……。でも、なんだろう……多分…嬉しい、んだと思う。久しぶりにお前に会えた事が。長ったらしい説教されて、やっとお前に会えた実感がわいてきたんだと思う。お前が来てくれて、安心出来たんだと思う」

しまった。

なんか思った事全部言っちゃって、恥ずかしい事まで口走った気がする…。

……恥ずかしい…。

忍野の顔直視出来ねえよ…。

「おいおい阿良々木君。そんな事言われちゃあ僕だって恥ずかしいじゃないか。恥ずかしくて君の顔を直視出来ないよ」

お互いを恥ずかしくて直視出来ない高校三年生男子と中年のアロハおっさんがそこには居た。

ていつか僕達だった。

……きもっ。

「こ、こほん。とにかく、僕は怪異に命を狙われているんだな？夢の中で皆を殺したのも、僕を精神的に追い詰めて自殺させるため、って事なんだな？」

切り替える。

切り替えは重要だ。

いつまでもこんな気持ち悪い雰囲気にいる訳にはいかない。

……マジで気持ち悪かった。  
うえ……。

「ああ、間違いないと思うよ。ていつか、そうでないならこんな事する意味がない。夢とは言え何ヶ月もかけてるのは不思議だったけど……。どうやら、阿良々木君を不幸のどん底に落としてから殺したいようだね」

「不幸のどん底に落としてから殺す……」

なんて悪趣味な怪異だ……。

そんな怪異まで居るのかよ。

……世も末だな、リアルな意味で。

「ああ、多分ね。…大方、自分を不幸だと思ってるどっかの馬鹿達が幸せな奴を憎んで、それが呪いにもなったんじゃないかな。阿良々木君、最近彼女も出来たし友達も増えたよね。正義マンな君にとつてそれは、とてつもない幸福だったんじゃないかい？だからたまたまその呪いに目を付けられた。今のところ僕はそう思っているけど」

「……それ、僕加害者か？」

さつき忍野に被害者面が気に喰わねえつつつてんだよ、と言われたのを思い出す。

そう言われてさつきから心当たりがないか考えたり、反省したりしていたのだが…。

「加害者だよ。リア充は僕みたいな非リア充からしたらム力つくことこの上ないからね」

「ただの八つ当たりじゃねーか！」

反省なんかした僕が馬鹿だった！

返せ！僕の反省を返せ！

「はは、ナイスツツコミだよ阿良々木君。それでこそ阿良々木君つてもんだよね」

「僕の個性がツツコミだけみたいに言うのをやめろ。ていうかふざけんな。そんな理由で命狙われて堪るか」

「いや、それに関してはふざけてなんていないよ。阿良々木君が狙われた理由としては概ね合っているはずさ。怪異なんてそんなもん

だからね」

「……………」

マジかよ。

……………納得出来ねえ。

「でもそれにしたって阿良々木君。本当にこの世界が夢だって事に気付かなかったのかい？」

「ん？ああ、全く気付かなかった。ていうか今だって信じられないくらいだな、ここが夢の中なんて。こんな現実的な夢があるのかよって感じ。頬をつねっても痛いだけで覚めなかったし」

「……………現実的、ねえ……………」

「なんだよ。おかしいところあるのか？僕からしたら全てが現実と全く変わらないんだけど」

「……………阿良々木君って、巨乳が好きなんだっけ」

「なんだよ藪から棒に。……………まあ、そうだよ、悪いか」

「いや、別になんてことないさ。決して町行く人全てが、服がぱつっんぱつっんになるくらいの巨乳美人だったのが気になったりしてる訳とかじゃないよ」

？

意味がわからない奴だな。

どこか残念なものを見る目で僕を見ている気がするのは気のせいだ

ろうか。  
いや、そんな訳がない。  
気のせいと信じよう。

「……まだ信じられないようだから、わかりやすいのをいくつか指摘してあげるよ。そうだね、まず、百合っ子ちゃんが車に衝突されて死ぬ訳ないだろう？彼女の運動能力なら絶対避けられるし、それが無理だったとしても左腕を使えば車を止めるくらい造作もないだろう。次に臥煙先輩達。彼らが死ぬ訳ないだろう。そしてこれは決定的だね。委員長ちゃんはどうしたの」

羽川は今ここには居ない。  
さっき僕が殺したばかりにも関わらず、だ。

「死体が……無い」

「君が気付いたからね。もう居る必要がなくなかったから消したんだろう。あと、今はまだ混乱しているせいで難しいだろうけど、大抵の事は何でもできるんだぜ、阿良々木君は。なんせ君の夢の中なんだからね」

「……………」

「…………阿良々木君、何でも出来るからって、自分の身長を高くするのは虚しくなるだけじゃないのかい？」

とりあえず、ここが夢なのはよくわかった。  
…………いいな、二二」。

「……まあ、それはもういいや。今はもうちゃんと夢だって事に気付

いてる訳だしね。それがわかってるならいいんだ。じゃあそろそろ、  
今からの事について話そうか」

「今から？」

「ああ、そうだ。今からのこと。阿良々木君は今怪異に命を狙われている。しかし一度それを回避した。……これがどついう事かわかるかい？」

どついう事？

どついう事って、そついう事じゃないのか？

殺されそうになったのを回避した……って、そうか、今してるのは今からの話か……。  
て事は……。

「やっとわかったのかい？全く阿良々木君は。もっと早く考えつこうよこの程度」

「うるせえ。急展開過ぎて頭がついていってないんだから仕方がないだろ。……つまり、まだ夢が覚めてないって事は怪異はまだ僕を諦めてなくて、これからも僕を殺そうとしてくる。そして一度失敗してるから今度はもっと確実に僕を殺しにかかってくるかもしれない。更に言うならどんな怪異かも完全にわかってる訳じゃないから対処法も完全には立てれない。って事だろ？」

「おお、ご名答だよ阿良々木君。なかなか成長してるじゃないか」

「ま、お前がどっか行ったあとにも色々あつて色々反省したからな。……ていつかさ、忍野」

「なんだい、阿良々木君？」

「……この状況、僕、やっぱりかなり危険なんじゃないのか……？」

「はっはー。正にその通りだよ。ピンチ、大ピンチ。さあどうするんだい阿良々木君。忍ちゃんも居ないんだから助けてくれる人は誰も居ないぜ？……ま、せいぜい頑張つてよ、僕は傍から笑いながら見てるから」

……決めた。

もし現実に戻れたら、僕はまずこのアロハのおっさんをぶっとばす。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2068ba/>

---

死物語【こよみメモ】

2012年1月6日20時53分発行